

本日の学び テーマ：「まだ悟らないのか」テキスト：マルコ8章14節-21節

【理解の手がかりとして】

この部分はいわゆる「四千人の給食」と呼ばれる奇跡、それは類似した「五千人の給食」と呼ばれる出来事に続けて行われた驚くべき奇跡に続けて記されているところ。

イエス様は弟子たちと一緒に舟に乗ってガリラヤ湖東岸を離れて、西岸の「ダルマヌタの地方」(8:10)に行かれた。ここで考えておかねばならないのは、一緒に舟に乗り、イエス様に従っていた弟子たちは、この時は「まだ」、その信仰が揺るぎないものではなかったということ。彼らは度々舟旅をするが、それが象徴するように、彼らは困難に出会う度に、舟が揺れるように、イエス様への信仰は度々揺れる。そしてそれはまたこの私たち自身が経験する弱さでもある。こうしてマルコ福音書は、イエス様を試みようとするファリサイ派(人間一般)の不信仰について語った後に、すぐに続けて弟子たちの信仰の弱さについても浮き彫りにするのである。

「弟子たちはパンを持って来るのを忘れ、舟の中には一つのパンしか持ち合わせていなかった」(8:14)とある。・・・なんと人間的な仕業であろうか。この状況、つまり舟旅に「パン」を忘れたということ、つい最近、あの「四千人の給食」を目の当たりにしたばかりで、そのパンの有り難さを痛感したばかりのはず・・・なのに、彼らは「忘れた」・・・なんと愚かな人間らしい彼らであろうか。

「忘れもの」、それは「失敗」とも言える。しかし私たちは何かを失敗したときに、いかに大切なことを見いだせるか、そのことが人生を、また信仰を造っていくような気がする。この「忘れもの」をした事態、大げさかも知れないが、命の保証とする食料を担保することをおろそかにした事態の中で、彼らは信仰的なチャレンジを受けたのだと思う。

その時に、かつての、いや今し方経験したばかりの「四千人の給食」の奇跡、その奇跡を起こしなされたお方、イエス様への信仰を強くして、「大丈夫！イエス様が共におられるから！」と言い得ていたなら、この舟上でのイエス様とのやりとりは随分違ったものになったことだろう。

しかし実際は、弟子たちは、そのたった「一つのパン」(8:14)をめぐる不安を覚え、どうしようかと議論しあっていた。だからイエス様は「なぜ、パンを持っていないことで議論するのか。まだ、分からないのか。悟らないのか。心がかたくなになっているのか」(8:17)と嘆かれたわけである。

ここで私たちが受け取るべき真理は、イエス様と共にいるとき、一切の思い煩いは不要である、ということ。・・・「一切の思い煩いは不要」・・・なんと私たちのリアル(現実)から遠い言葉のように聞こえる。反対に、思い煩ってばかりの私たちだからである。そういう意味では、イエス様がここで言われた「まだ、分からないのか」の「まだ」ということ、その信仰と不信仰の狭間で揺れ動くところに私たちの心もあるような気がする。

そのような私たちのリアルに、上から縦に切り込んでくるような御言葉がある。それは、第1テサロニケの手紙5章16-18節の「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。ど

んなことにも感謝しなさい」である。この「いつも」「絶えず」「どんなことにも」という局面にて、それは「喜べない時にも」「祈れない時にも」「感謝できない事にも」という言葉が裏写しされているわけである。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」——この垂直の言葉にあらさわれる私たちには肉眼では捉えきれない神の真実、その愛と恵みに私たちは支えられて、いかなる状況においても共におられる神の存在、そこに「信」を置いてそこに生きて行く、その信仰の世界へイエス様は弟子たちを誘っておられる。

前後するが、イエス様が言われた「ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種によく気をつけなさい」(8:15)とは、彼らの「不信仰」のことを指して言っておられるのだろう。そしてそれがあなた方の心に侵食しないように、あなた方の信仰に気をつけなさい、と言っておられるのである。

使徒パウロは言う。「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。・・・いずれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです」(フィリピ 3:12、16)と。パウロをもってしても「不完全」そして「何とか捕らえようと努めている」と言わずにはいられない、それが信仰者の道なのだろう。

私たちの世界は今、ガリラヤ湖にただよう舟のような様子かもしれない。明日はどんな風向きか、皆目分からない。しかしその舟の中に、イエス・キリストがおられる、その事実から目を反らさないようにしたいと思う。

弟子たちは「一つのパンしか持ち合わせていなかった」(8:14)のだが、しかし実はそこには「わたしが命のパンである」(ヨハネ 6:35)と宣言されたイエス様がおられる。それはつきぬことのない恵み、永遠の命を与えてくださる「命のパン」である。

私たちは揺れる。しかし離れないようにしたい。私たちは不完全。でも、その弱さをも認めながら、そんな私たちの信仰を導いてくださるイエス様を見つめて従っていきたい。「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」(2 コリント 4:18)

(聖書教育より) 「イエスさまは、無理解な弟子たちを繰り返し何度でも、ご自分と共に神さまを信頼して生きる歩みへと導こうとされるのです。」(聖書の学び～イエスさまの伝えなかったこと)